

『策略家はワガママに恋をする』

著：氷高園子

ill：サマミヤアカザ

「ちょっと、岩室くん……」

「どうぞ」

目の前にコーヒーカップを差し出される。うなずいて、手に取った。先ほどは意識を通りすぎた香りも、しかしこうやって我に返ると鼻腔を刺激する芳香だ。口にした中身は濃すぎず薄すぎず、絶妙な味だった。

「おいしい」

「よかったです」

各務の言葉に、岩室はにっこり微笑んだ。彼があまりにも近くにいることにいたたまれなくて、また遠のく。しかし岩室は容赦なく、各務の努力を無にしてしまう。

「気に入ってもらえて、よかった」

「う、ん……」

そしてその声は、いつもとは違う調子だと思った。各務の意識はすっかり本からも離れてしまい、近すぎる岩室との間隔に戸惑うばかりだ。

「あ、の……」

大きく胸が鳴った。動揺を抑えるためにもうひと口コーヒーを飲み、それに再び胸が大きく鳴るような気がした。

「先生？」

不思議そうに呼びかけてくる岩室の口調に、こんなふうにも動揺する自分がおかしいのだと思う。この気まずさを誤魔化すためにはコーヒーを飲むしかなくて、カップはすぐに空になってしまった。

「どうかしました？」

「どうか、って……」

うつむいたままちらりと目だけを動かすと、岩室の唇が目映った。あのときのキスが蘇る。唇の柔らかさ、入り込んできた舌の濡れた感覚、舐めあげられたときのことが鮮やかに脳裏に浮かんで、また背中が震えた。

「先生……？」

ぎゅっと目をつぶった。そうすると聴覚は、ますます鋭く敏感になる。伝わる彼の呼吸はどこか甘さを孕(はら)んでいて、各務の奥にある何かを揺り動かすようだ。

それはどこか、性感に似ている。キスして舌を絡ませあい、粘膜を探り合って吸い上げて。そんな淫(みだ)らを思い起こさせる。

「いや……、あ、の！」

生まれる感覚を誤魔化そうと、ことさらに明るい声をあげた。懸命に彼から体を遠のけながら、尋ねる。

「あの、先生は？ いつごろお戻りになるのかな」

「父？」

岩室の声が、急に尖る。彼の反応に驚き、何か悪いことをしてしまったかと慌てた。

各務に向けてくる視線は鋭くて、口調同様に怒りを孕んでいるようだ。言うべき言葉を見失い、各務は口をぱくぱくさせる。

「う、ん。お戻りにならないのに勝手にこんな、勝手にあがってて悪いなって……」

「そんなに父のこと、好きですか」

「……え？」

「ここにいるの、俺ですよ。なのに、そんなに父さんのことがいいわけ？」

「岩室くん……？」

彼は、言葉遣いも変わっている。目の前の犬がいきなり狼(おおかみ)に変わったようなでも表現すればいいのか。それでいてどこか寂しがっているような色がある。そんな突然の豹(ひょう)変(へん)を目の前に、固唾を呑んだ。

また腰をずらす、岩室は追ってくる。じっと見つめてくる目に、この部屋に足を踏み入れたときとは別の意味で胸が鳴るのを抑えられない。同時に見つめてくるだけではない、確かにそこに宿っているものに瞳(どう)目(もく)した。

「岩室くん……？」

書斎の窓から差し込む光に、彼の瞳が反射してきらめいているように見える。じっと注がれてくる目がどういう意味を孕んでいるのか、見つめる岩室が各務に何を求めているのか。

わかるのは、伝わってくるのは正体のわからない熱だということだけだ。背に、ぞくりとした痺(しび)れが走った。

「先生」

呼びかけてくる声は、いつもとは違った。岩室の手が伸びてくる。彼の手が、腰を引き寄せる。顔が近づいてくる。

「……あ？」

唇に柔らかいものが触れた。逃れる間もなく呆然と受けとめながら、しかし何が起きているのか、とっさに理解できない。

自分の唇に重なっているものが何なのか、何をされているのか。それに気がつくのに、時間がかかった。

岩室に、キスされている。見た目よりもずっと柔らかい彼の唇に包み込まれる感覚は心地よくて、優しく重なってくるのに自然に瞼(まぶた)が落ちた。

小さく笑う震動が伝わってくる。なぜ彼が笑うのか、考える余裕は各務にはない。

「ん、っ……」

舌先で唇の形をなぞられて、そのくすぐったさに肩が震えた。腰に添えられていた手が腕をすべり、震えを抑えるように力が籠(こ)もる。

伸ばされた岩室の舌が、唇をなぞった。つられるように開いた口腔に入り込み舌がうごめき、歯の形を確かめるように上の歯列と下の歯列を繰り返し這う。逃げようとすると各務の舌を追いかけてきて絡めとり、さらに深く重ねてくる。

身(み)悶(もだ)えしても、岩室の手はゆるまない。それどころかもっと強く引き寄せられて、もっとキスを深くされて。口もとを吸い上げられ、薄い皮膚が刺激を敏感に受け取る。

「っ、あ……」

かき回す舌は温かくて、それがうごめき探られる感覚は、体中に蕩(とろ)ける蜜(みつ)が広がっていくようだ。粘ついた愉(ゆ)悦(えつ)は細かい瘰(けい)癧(れん)になって

全身に満ちて、各務はぶるりと震えた。

各務の唇に甘い味がついてでもいるかのように、キスは執(しつ)拗(よう)だった。なぜ自分はこんな反応をしてしまうのか。混乱する脳裏はどんどん霞んでいく。

「や、あ……」

引けた腰に回った腕に強く引き寄せられ、重なった下肢に熱を感じる。腰骨に触れるそれが何なのか。熱の正体に考え及んだ瞬間に自分の置かれた状態に思い至り、にわかに頭がはっきりと覚醒した。

「……ん、っ！」

大きく目を見開く。強く岩室の腕に抱きしめられて、与えられるキスに酔っているということ。それに抵抗する力さえも、奪われているということ。

とっさに首を反らせて逃げようとする、音を立てて唇が離れた。あがった濡れた音に羞恥が走る。目眩を感じるのと同時に再び唇が重なってきて、快感にとらわれるままに各務は叫んだ。

「や、だ……！」

入り込もうとする舌を遮ろうと各務は歯を食い縛り、岩室の胸に手をついた。力を込めて押し返しても、彼の体は動かない。それほど体格は変わらないはずなのに、なぜこうもたやすく押さえられてしまうのか。岩室はよほど腕力に優れているのか、それとも。

「やめ、って……っ！」

ゆるまない腕の力に、反射的に足が動いた。膝が岩室の脇腹に当たったが、力の向きの逸れた蹴りは岩室にダメージを与えるどころか、彼を小さく笑わせただけだった。

「当たりませんよ。そんなの」

彼は手を伸ばす。強く足首を掴まれた。それでもう足は動かせなくなってしまう。背に手が添えられた。ゆっくりと視界が変わって行って、後頭部に絨毯の柔らかさを感じた。目の前には影の落ちた岩室の顔と、天井がある。

床に押し倒された。そんな自分の体勢に気がついたときには、もう遅かった。体全体で動きを封じ込まれて、身動きができない。

本文 p73～80 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>